

武蔵野日曜聖書講筈 降誕節

キリストの愛に生きん!

— 賀川豊彦伝 —

— ルカ伝第1章26〜38節 —

1991年12月22日

小池辰雄

カイノス キリストの愛に生かされている 御霊の愛 素晴らしい魂 霊止であれ 少年賀川
聖霊の愛のひと 愛のドラマ 信交は信行となる

【ルカ1】

26 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。27 この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。28 御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』29 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、30 御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31 視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。32 彼は大人らん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33 ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』34 マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35 御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。

● カイノス

クリスマス、おめでとうございます。これで、クリスマスも、51、52回迎えたわけですが、毎回新しいんです。それは、今度の『エン・クリスト』49号（1992年1月冬季号）のソネットに

「ネオス ウント カイノス」（古びていく新と古びない新）

という詩を私書きました。「新年、おめでとう」と言つて、その年を新しく祝うのは、段々それが古びていく。しかし、私はここに、



「深い根源現実では永遠の^{カイノス}新である」
と書きました。ギリシヤ語に、「ネオス」という字と「カイノス」という字があつて、「ネオス」の方は、新しいけれどもまた古びていく、朽ちていく。ところが、「カイノス」の方は古びない新しきで常に新しい。だから、新約聖書は

「カイネー ディアテーケ」
といつて、「新約」の「新」の字は、この「カイノス」を使つてある。新約聖書は決して古びない、そういう新しきです。常に新しい。

「常に新しい」
とはどういうことですかね。これは、瘦せがまんしたつてダメなんだ。刻々に死んでいなければダメなんです。刻々に死んでいる人が、本当に刻々に新しい人。非常に逆説的なものの言い方をしましたけれども、常に自分が無くなっていると、常に新しい自分がそこに生きていく。「即」の世界です。

それは何が表しているかというところ、我々の呼吸が表している。吸うでしょ、そしてまた吐くでしょ、また吸うでしょ。この呼吸のコツが、「常に新しい」コツなんです。そういう生命の世界の不思議な逆説的な構造になつている。これが「カイノス」の新しきです。

●キリストの愛に生かされている

私は、今日の題に「愛」という字を二つ書いた。

「キリストの愛に生きん!」

と、

「愛の光」(夕の祈禱会の題)

です。本当は「生きん」ではない、「生きている」「生きる」、もうひとつ言うと、「生かされている」です。我々はキリストの愛に生かされていなければ、クリスチャンではない。そのことの徹底的な自覚を、我々は今日したいと思います。

本当の現実、絶対界を受け身で受けとつて世界です。これは本願の、靈願の力だから、どうしようもない。キリストの愛は、それから逃げようとしたつて逃げられない。キリストの愛から逃げようとしたつて、これは逃げられない。そうすると、

「キリストの愛が我々の中で生きる。キリストの愛が我々の中で生きなかつたら、クリスチャンでない」

と。そのことをはつきりと今日は自覚して——私は、これは全召団に向かつて語つているんです——そういう生き方をしてください。何も畏^{かしこ}まる必要はないですよ、楽しく本当の世界に入つてください。

「キリストの愛に生きん」と書きましたが、「生きん」ではないんだ、本当は。さつき言いましたように、「生きている」。もうひとつ言つと、



「生かされている」
 ということ。我々は、そういう現実でなければ、キリストの有でない。非常にはつきりしている。

「愛無きものは神を知らず」

と、ヨハネの書翰にも書いてある。愛無き者は人にあらず。「永遠の生命」とは、その質は愛です。愛でなければ、決して永遠ではない。

そういうわけで、人並みの愛ではダメなんだ、キリスト者の愛というのは。私はそのことで一番感激して、このあいだから読んでいるのは、賀川豊彦です。賀川豊彦のような存在は無教会にはいない。そのことを私ははつきり知って、びっくりした。参りました。内村鑑三先生は、もちろん先生としての大事な使命を果たしました。でも、愛の人でなかったから、キリストの十字架にしがみつかざるを得なかった。

「我は罪びとの首だ」^{かしら}

と、内村先生が言われたのは、非常に我が強い方ですから。先頭に立って素晴らしい事をなされた。先生の業績に私は決してケチをつけるのではない。先生の文章は素晴らしい。若い人は大いに読まなくてはいいかん。

けれども、賀川豊彦は本当にキリストの愛を地で行ったひとです。どん底の人たちを相手に何回も死にそうになった。病気には罹るし、トラホームが移ったりして目を悪くしてしまう。彼の伝記を読んで、私は正直、なぜ今までしつかり読まなかったのかと思って後悔している。その中のあちらこちらを少し後でお話します。あの

『死線を越えて』

という本は、出た時に百万部売れた。その印税は全部、困っている人やいろんな人のために費やしたという。

もう一人いる。それはむしろ「愛」というよりも——日本の教育は福音によらなければダメだということをつくづくアメリカで知って——同志社大学を建てた人、新島襄です。これは明治以前からいたプロテスタントの先駆者だ。大変なひとだ。新島さんと賀川さんには、私は新しく学んだ。無教会の先生方は、大体相手がインテリだから、

「研究、研究」

と言って、「聖書の研究」という言葉が躓きになっている。我々は、お互いに本当の認識をして進んでいこうではありませんか。

●御霊の愛

ルカ伝は不思議な書です。キリストの誕生のところと、復活のキリストのところを一番素晴らしく表しているのが、このルカ伝なんです。

30 御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31 視よ、なんじ



孕^{みこも}りて男子を生まん、其^その名をイエスと名づくべし。

今度の『エン・クリスト』49号の詩にも書いた、

「聖霊がナザレの乙女マリヤに

カリスマ的なたらきをなし、

その名「神の救」たるイエスの誕生

となったと。「神の救」とはヘブライ語で「エホシユアー」という。特別な生まれ方をなされた。

聖霊イエスを荒野に導き給う。

イエス破天荒の四十日四十夜の断食をなし、

神のみ言を喰い、且つは聖霊に燃え、

且つは聖霊に潤い給う。」

断食は、キリストは何のためになさったかというと、

「神のみ言を喰い、且つは聖霊に燃え、且つは聖霊に潤い給う」

ためである。火と水だよな。燃えたり、それから、本当にそれに浸って潤ったりする。これは聖霊の世界の素晴らしさです。「水火相容れず」ではない。本当の火になるひとは、本当の水にもなれる。

私は楽しくてしようがない。全身が燃えるから、病はとつつかないんだ。私は聖霊がきてから、病んだことはないものね、正直。風邪の方で逃げて行ってしまおう。そうすると、人間小池は何かバケモノみたいだけれども、バケモノではないよ。私は当たり前人間だ。皆さん、それほどに、

「キリストさまー!」

と、全身で無言の叫びをしてご覧なさいよ。直ちに、その世界に入ってしまうから。簡単なんだ、私の祈りは。一つにされてしまおう。とっ捕まってしまうんだから。もつたいぶつた信仰でも何でもない。私はもつたいぶることが嫌いだ、ポーズなんてものは。今日は号に「天童」と書いた。子供なんだ、私は。幼子だ。

³⁵御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高^{いとたかきもの}者の能力^{ちから}なんじを被^{おほ}わん。此

の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称^いえらるべし。³⁶視よ、なん

じの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕^{はら}めり。石女^{うますめ}といわれたる者

なるに、今は孕^{みこも}りてはや六月^{むつき}になりぬ。³⁷それ神の言には能^{あた}わぬ所なし』³⁸マ

リヤ言う『視よ、われは主の婢女^{はしため}なり。汝の言のごとく、我に成れかし』つ

いに御使、はなれ去りぬ。

「御言の如く我に成れかし」と、これは大事な言葉です。キリストの言、その業の力で、

「どうぞ、私をお使いください。告白させてください」

と。もう、恐れなく言わなければダメですよ。



「お前たちは、すべての人に憎まれん」

と、キリストはおつしやつた。憎まれたつて、一向差し支えない。本当の愛は、なかなか通じないことがあります。賀川豊彦も随分やつたけれども。まあ、ひどいやクザなんかを相手にして、よくやつたもんだよ。時々、本当に死にそうになった。

キリストは本当に天の父に愛され、天の父を愛した。彼の愛の生命はみな、神さまからやってきている。いかなる病人も、いかなる精神病者も、死人すらも、甦らせるような力が働いた。全部、これは聖霊の愛です。手島さんや私を通して、幾人の人が助けられたか。みな、これは御霊の愛です。

● 素晴らしい魂

賀川豊彦の或る面を少しご紹介しておきます。豊彦は、ご承知の通り、めかけ妾の子です。お父さんが芸者と関係してつくつた二番目の子供。

日頃信心の豊受大神のお陰だと言って、

豊彦と名付けて、かめに言った。

「この子は出世するよ、神さまの子なんだ」

不思議なことを親父が口走つた。

ところが、妾といわれる芸者さんは、これは実は素晴らしい魂なんです。偉人のお母さんというのはみんな魂が素晴らしい。賀川さんは、芸者の子だなんて、なにか非常に身狭に感じていたらしいけれども。終りになつてから、その正妻が賀川豊彦の在り方にすっかり参つてしまつて、むしろ、豊彦の所にやつて来たんだよ。この芸者さんは、親父が亡くなつてしばらくして逝つてしまつた。何しろ、賀川さんというのは、そういう不思議な生まれをしている。神さまは、そういうた路をすら通して、真理を、本当のものを現そうとなさる。神の道とは驚くべきことです。マタイ伝1章のキリストの系譜の中にもあるでしょ。マタイ伝がちゃんとその事を表している。

「サルモン、ラハブによりてボアズを生み、ボアズ、ルツによりて……、ダビ

デ、ウリヤの妻たりし女によりてソロモンを生み」(マタイ1:5:7)

「ラハブ」は遊女、「ルツ」は異邦人の女だよ。「ダビデ、ウリヤの妻たりし女によりて」と、ダビデは悪い事をした。けれども、ソロモンというのがあらわれてきた。

その人の生まれがどうかこうだということよりも、その人自身が、各人が神に直結する世界だということです。生まれは別に悪くはない、ユダヤ人中のユダヤ人のサウロは、パリサイ中のパリサイで、クリスチャンを迫害してた。それが、復活のキリストにひっくり返されて、

「**なんぞ我を迫害するか!**」

と、やつつけられた。パウロの回身というのは素晴らしいものだね。ひっくり返された。



● 霊止であれ

とにかく、人間は、一人びとり、どういう路をとろうがいいです、そんな相対的なことは。問題は、本当に、キリストに捕まっているか、キリストを生きているか、それだけが問題です。カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、無教会であろうと、幕屋であろうと、何だつていいよ、属するところはどこだつて。問題は、その人が

「本ものか」

ということだけ。その人が本ものかということだけが問題です。環境、運命、どうだつていいよ、そんなことは。大事なのは

「本ものである」

ということです。

「ビー ジェントルマン」(紳士であれ)

と、クラークが言ったね。それもいい言葉だけれども、私ならば、

「ザイ メンシュ」(人間であれ)

と言いたい。

「本当の人間であれ」

というのは、

「霊止ひとであれ」

ということです。神の霊が止とどまっている、キリストの霊が止ひとどまっている、「霊止ひと」であれと。我らは霊止であらん。キリストは驚くべき愛の権化ごんげです。

『イミタチオ クリステイ』(キリストにならいて)

という本があるね。あれは、「イミテーション」という言葉はあまりよくない。あの著者はトーマス・ア・ケンピスだ。けれども、トーマス・ア・ケンピスとか、アッシジのフランシスとか、サンダーシングとか、ザビエルとか、その部類に属するのが賀川豊彦です。新島襄のあの精神が今、同志社大学で生きているかな。私は知らない。いわゆるミッション・スクールも、先生方はシツカリしなければダメだよ。

問題は一人です。歴史は個人が動かしていく。「個」が。「個」の非連続の連続ということ。ゴルバチョフは20世紀の政治家の第一人者だ。あの人は神を畏れるひとだ。共産主義から出てしまった。「宗教は阿片」ではない。

「我は神の言に酔えるなり」

と、エレミヤは言った。熱烈たる魂です。

● 少年賀川

賀川豊彦の親父は、

「この子は出世するよ、神さまの子なんだ」と言った。



預言みたいな言葉だね。ところが、友達がみんな、

「お前は妾の子じゃないか」と悪口を言っつ。

少年賀川は悲しくてしょうがなかったんだね。私も、父が五つの時に亡くなったので、悪い友達が私のことを

「親父なし」

と言っつて、からかう。

「今に見てろ」

と思っつた。

少年賀川が、親父が亡くなったものだから、正妻のところにお姉さんと一緒に預けられた。ところが、この正妻が虐待した。けれども、賀川豊彦は、勉強はしてました。学校の小遣いの少女が、ふじえという女の子ですが、これだけが彼に話しかけてくれたという。ただ一人の慰めであった。これが居なくなっつてしまっつた。肺病で死んでしまっつた。昔は肺病というと大体死んでしまっつたんだね。また、それで一人になっつてしまっつた。

とにかく彼は優秀でトップ級ですから、中学校に入る。中学校の先生に、ローガンというアメリカ人の先生がいた。もう一人、マイヤーズというひと。この二人を通して、英語を学びながら、聖書の話聞いた。それで、聖書の話聞いて、彼は少し動きだした。関心が出てきた。そしてまた、ローガンさんも、マイヤーズさんも、この賀川という少年に目を注いでいる。お金がないから、大分それも助けてくれた。

ある墓場の所で、彼はまた泣いていたんだね、自分の運命をかこつて。

「生まれざりせばよかりしものを」

という、ヨブのような気持を持っつたんだ。そして、肩に手を置く人があつた。誰かと思っつて、見た。マイヤーズさんの教会の先輩で、森茂という青年だつた。それで、二人で歩いて、森茂が讚美歌を歌いだした、「夕日落ちて空くらく」という歌を。鳥がねぐらへ飛んでいく。森茂が、

「心配するな」と。なにか、森茂に非常に慰められた。

「あなたは、こんなに遅く、どうしたんですか」と、彼は聞いた。

「ちよつと寄る所があるんだよ、面倒を見て上げたい人があるんだ」

「ああ、そつですか」

明治37年——これは私が生まれた年だね——2月21日、全生涯をキリストに捧げんと、彼は徳島教会で、マイヤーズ博士から洗礼を受けました。それは、丁度、日露戦争勃発の月ですから、青年たちは非常に戦意に燃えていた。ところが、洗礼を受けてしまっつた。この洗礼を受けたことは、彼にとつては福音の戦いの宣戦布告です。トルストイのものを読んんで、絶対無抵抗の愛というものがいかに素晴らしいものかということに感動した。トルストイが『告白』という本で書いてますから。それで、彼は大分強くされた。



ところが、これは戦争だから、訓練を受けるわけだ、銃を持って。そうしたら、少年賀川は銃を投げ棄ててしまった。

体育の教官が、

「銃を取れ」

「いやだ、人殺しの訓練なんか受けたくない」

教官は鉄拳を食らわせてぶっ叩いた。豊彦は鼻血が出た。

「貴様は非国民だ」

また蹴飛ばされた。

「こいつは国賊だ」

叔父さんも

「お前は洗礼を受けたか」

と聞いて、豊彦は家を出されてしまった。

一九〇五年、卒業したが、行き所がない。

その時にも「神はわが避所」

となったのは即ち、マイヤーズさんが「私の所に来なさい」と、彼を助けてくれた。

そこで今度は、明治学院を受けて、高等部神学予科に明治28年春、豊彦は入学しました。猛然と読書にかかります。図書館のめぼしい本を一日一冊づつ読んでしまった。

● 聖霊の愛のひと

賀川さんは博覧強記で、実にいろいろなものを読んで、それをよく覚えている。私は賀川先生の講演を一遍聞いたことがあるけれども、数字なんかも、何も見ないでペラペラ言うんだよな。驚いてしまったね。精神科学も、自然科学も、天文学も、いろんな事に詳しい。しかし、本当に聖霊の愛のひとです。明治学院時代にももの凄く勉強した。いつでもトツプですよ。コーヒー店なんかには行かない。談話なんかしている暇があるか、というわけで。彼の親友には、加藤一夫かずお、これも有名な人です。村田四郎、これもキリスト教界の人です。佐々木邦くに、中山昌樹まさき、これはダンテ全集を訳した、イタリヤ語の非常にできる人です。高田銀造等。これらは終生の親友です。

帰ってから、マイヤーズさんに、

「あの森さんという人に私は墓場で出会ったんですが、

あの人、『面倒を見なければならぬ人がある』

と言ったのはどいつのことですか」と聞いた。

「それは、彼は癩病人の所に訪ねていったんだ。

癩病人が小屋に一人いる。

彼はいろいろ、着物を着せたり、食物をやったり、



そついう面倒を見ていた。ところが、彼は戦争に招集されたので、戦地から十日に一度の煙草銭を使わずに貯めて、それを私の所へ送って、『あの癩患者が飢え死にしないようにお願いします』と言って来た。

それだから、私もその事を彼の言つ通りにやっているんだよ」

と。森茂というのは、そういう素晴らしい愛の人です。それで、この森茂の癩病人に対する隠れたる愛に賀川豊彦は参ったんです。私もそのように生きようと、これがひとつの彼の転機になる。もちろん、読書は続けますけれども、今度は、具体的に愛の行為にでる。

時々、豊彦がいなくなる。

「どつしたんだろうな」と、中山昌樹が彼の後をつけて行った。

そしたら、豊彦は町外れの貧民窟に行つて、

可哀相な子供たちにお菓子をやったり、

着るものがないと着物をやったりしている。

それで、彼自身はボロボロの着物になつてしまつ。

それを見かねて、ある女の人が彼に着物を贈つたら、

それも貧乏人にやつてしまつた。

全くその通りに生きて、彼自身が、あまりそういうことをやっているうちに微熱が出て、血痰が出て、一種の軽い肺病になつた。しかし、彼は病身を自分で顧みない。

肺から血がでる。熱は四十度。もう危ない。

医者絶望とみて、親戚の者を呼んだ。

ところが、豊彦はその晩のことを後で語りました。

「死を予感した。魂が次第に肉体を離れてゆく。

すると、光輝く美しい広野に導かれた。

パウロやパスカルが神を見て歎びに酔つたのも、

こういつことだなあと思つた途端に、

急に地上に引き戻されるのを感じて目が覚めた」

それで、この危機を脱したんです。賀川さんはまだまだまだ仕事のあるひとだから、神さまはもう一遍もどしてしまつた。あともう一遍、同じような事があるんですよ。二度、死にそうになつた。

闘病生活、更に四カ月。

「わが汝らを遣すは羊を狼の中に送るが如し。

されば、蛇の如くさとく、鴿の如く素直なれ」

という聖句にぶつかつて、ハツと思つた。

「よし、これから自分はまたやりなおさつ」と。

それで、今までの体験を書きだした。



『鳩の真似』という自伝的小説を書いた。
これを雑誌にのせよと思った。石油箱を机にして書いた。
これを浄書して原稿を持って行って、明治学院の先輩島崎藤村を訪ねた。
藤村はこれを読んで、

「結構だ。けれども、ちょっとまだ時期が早い。
あなたが大事な出世をする時にこれを本にしなさい」
と。それで、本にするのをやめた。しまっておいた。

彼の身体は、過労のために、また悪性の蓄膿症にかかってみたり、死線を越える。

『死線を越えて』という本があるでしょ。あれはその体験から来ている。

危機の夢の中で、今度は明治学院時代に面倒を見た皮膚病の犬が現れた。

「ジロー、お前どこにいるんだ」

乞食の子らもボロを纏まとって現れた。

癩病人も杖にすがって現れた。

浮浪者や酔漢がよろめいて来る。

みんな悲しげな顔つきで彼を見る。

「神さま、もう一度 私を助けてください。気の毒な人達のために働きます」

賀川は切々と祈った。

そこで、また戻されて、また回復してしまった。一か月後に退院した。

●愛のドラマ

京都大学病院で入院中に、『ジョン・ウエスレー伝』を読んで、その聖霊の器に感激した。
それで、新川の貧民窟に出掛けて行った。貧民窟で部屋を借りる。大変だよ、人殺しのあつた部屋だから、幽霊が現れるといつて誰も借りない。壁には血の痕があつたりする。三畳と奥が二畳。ただひと部屋。十軒長屋の二軒目のボロ家。

「これを借りる勇あらば家賃は月に二円なり」
と。賀川は直ぐそこで約束してしまった。もともと棄身の人ですからね。そこで、キリストの愛を実践した。

マイヤーズさんがおもちゃをクリスマスに送ってくれたので、その貧乏人の子供達にみんな分けてやったら、争ってね、せつかくのおもちゃが、腕がもげたり、汽車の車がかとうかなくなってしまったり、それでも彼らは喜んだ。

「そんなに争ったらダメだよ、おもちゃが壊れるじゃないか」
なんて言っただけ。

ヤクザが「五円かせ」と賀川に短刀を突きつけた。

「そんなお金はない」と断る。



丁度その時、林が帰ってきて、ヤクザととつ組み合つ。

逃げて行ったが、別のヤクザを連れて戻って来て、

「私の縄張りを荒らしている、けしからん」と詰めかかり、

七輪を蹴飛ばしたりする。

ひどいもんだね。それでも、彼は絶対無抵抗です。

賀川は海岸に逃げてから、また帰ってきて、

七輪の火を起こし、ありあわせのものを食べさせてやった。

相手を「園田さん」と呼んで、

「気の済むまま食べてくださいよ、私はこの新川が好きなんですよ」

と本気で言つものだから、ヤクザの方も少しおさまった。

そして、箆笥の中を探し回して、善い事に使おうと思つてせっかく貯めておいた二〇円をみんな持つていってしまった。「恩にきまずぜ」なんて言つてね。とにかく、大変な所です。そういうところを経験している。

マイヤーズさんが一膳飯屋の「天国屋」なんてのを開業したが、とうとうそれも終いにダメになった。これは何とかして貧乏人を助けることのもつと根本的なことをしようと、彼はアメリカに留学することになる。まだまだ、いろいろ非常にドラマチックな事が続きます。愛のドラマですからね、彼の生涯そのものが。

● 信交は信行となる

我々のこのクリスマスは、そういう意味で——何も賀川さんの真似をするわけではない——我々一人びとりが本当にキリストの愛に生かされていく。正に、生きていく。

もう、「信仰のみ」なんて言わない。無教会で私は散々

「信仰のみ」

と聞いてきた。ダメなんだ、ただ「信仰のみ」なんて言つてたつて。「しんこう」は信じ「仰ぐ」ではない。キリストとの本当の霊的な交わりの世界に入つて「信交」となる。そして、それは必ず、「信行」となる。信ずること自身が内的な魂の行為ですから。要するに、行為なんです。

「御意を行う者のみ天国に入れる」

と、キリストが言っている通りです。私は無教会の観念信仰に永いこと居て、もったいなかつたよ、正直。しかし、無教会の先生方は、それぞれの役割を果たされた。

一番、「信仰のみ」と言つたパウロが、最も素晴らしい「行為」を展開した。マルチン・ルターがそうだ。

「信仰と行為ではない。信仰のみだ」

と、ルッターもそう言つた。けれども、ルッター自身があのように本当に全存在を行為を



もって表した。そういう意味で「信仰のみ」と言っているのなら、わかる。けれども、観念に化してしまつたら、もうダメなんだ。正に、「信仰」とは、「信交」がもとで、それから「信行」になる。

本来行動的でない私は、かく言わざるを得ないわけです。しかし、顧みると五十年間とにかく伝道はしました。片手間伝道ですけれども。ですから、とにかく、皆さんもそれぞれ隣人にこの福音を伝えなかつたら、申し訳ないですよ。いい気になつてしまつたらダメです。自分で分かるです、本当の生命はいずこにあるかということが。キリストの愛を生きているところに、本当の生命がある。本当は、「愛」は語る世界ではないけれども仕方がない、やむを得ず語らなければならぬ。皆さんも機をみて、どうぞ、新島襄と賀川豊彦の伝記はお読みになるといい。

清瀬の療養所で語つた、ルカ伝の『言い逆らいの徴』——これは第一巻（『無者キリスト』）に出ていると思うが——キリストは言い逆らいの徴だということ。こんなに愛を実現したのに、それを受けとつた民衆が、なお煽動にのつかつて、

「キリストを十字架につけろ」

なんて言つたのは、何ということだと思うね。

賀川さんを貧民窟で皆が

「てんてい、てんてい」

——「先生」のこと——とか言つて非常に慕つた男の子も女の子も、大きくなつたら、みんな信仰を棄ててしまつてゐる。飲み屋で働く女だの、ヤクザだの、スリになつたり。賀川さんは嘆いた。その事はもう既に予知して祈つていたけれども。

無駄になつてもいい。とにかく、愛せざるを得ない、救わんとせざるを得ない。福音は、そう簡単には移つていかないんだ。

私は、東大で随分脱線して、ドイツ語の時間に話した。テキストにもそういうものを使つたり、ルターの『キリスト者の自由』も使つたこともある。それでも、聞くのは興味をもつて聞いているながら、本当にその世界に入ろうとはしない。しかし、いいよ、結果はどうでも、やることはやつておいた方が。いつか気が付いて、一人でも二人でも出てくればいい。

「ああ、やつぱり私は間違つていた」

と。もう、この世界に入つたら、他の所には行きどころがないですよ、有難くて。この、有難い楽しさを人に分けなくてはいられない。分けざるを得ない、語らざるを得ない、話さざるを得ない。大事な時には、「ナイン」「否」と言つて、突き進んでいく。そうやつて、お互いに助け合いながら行きましょう。今日は、朝から、始めから終りまで、

「キリストの愛」

に終始するつもりですから。

